

取扱注意

復命書

小 聡 等

命により昭和二十八年六月二十二日から六月二十七日まで六日間  
竹島における漁場調査のため出張致しましたところその状  
況を別紙の通り復命します

昭和二十八年六月二十八日

水産商工部 漁政課

澤 富造

事務吏員

水産商工部 水産課

井川 信夫

技術吏員

知事 恒松安夫 殿

## 一 行動の概要

六月二十二日

境海上保安部にて中央各省の連絡のもとに、下達された第八管

区本部長の命令を中心とし井内警備救難部長以下関係官 島根県

口警備島根県本部 入国管理局松江事務所の関係取員と島の実情調査

事項及び関係機関の部署につき協談打合

巡視船くまりゆう（ロロ）のしる、にて船隊を編成、おきみうらを境に待た

せしめて応援に任せしめ、船隊の指揮については警備部長、船隊の行動に

いては本部長が直接指揮をとることとなり一五、四〇船隊は境を出航

六月二十三日

四、二五 方位 $\angle$ 三四五度一〇海里に竹島を現認、近接の上島を一巡しつ  
の上陸地点を捜査

五、三〇東の島のSN一、二〇〇米地点に到達、カッターに乗組五〇〇米地点まで  
カ漕したが、凡雨の中浪高く接岸不能

指揮官の命により八〇〇基地に向い帰航

この間、のしる乗組の保安隊員一名海中に墜ち、顔面裂傷（手術を要する

重傷、くかりやうは、カッターを小破し保安隊員一名海中に墜落せるも救

助

くかりやう 二一三〇 西郷港に帰航  
のしる 二三〇〇 境 港に帰航

六月二十四日 指揮官以下後圖を策し、西郷港にて待機

受援県試験船才一伊予丸(さば はお釣)入港し、同船長から竹島西  
方にて韓国漁船(五トン位、三人乗組)に会い、話し合った情報を聴く、  
(韓国船は、暴風雨の中遭難せる模様で、或いは沈没の推定も下せる。)

鵬丸 竹島出航の情報を得る、為に船隊は、企圖秘匿のため本日の出航を延期  
する

一一〇〇 おき 境より船隊に加わる

二一三〇 鵬丸 里見毎日記者、土木出張所長を乗せ、竹島へ出航せるを現認

六月二十五日 西郷港から浦郷港に回航

一九三〇 竹島に向ヶ出航せるも二一、三〇気象特報のため引返すことに決し

二十六日 三三〇浦郷に帰港

六月二十六日 鵬丸よりの情報を浦郷警察署から得る

船隊は一八二〇 目的地に向ヶ出航

六月二十七日 五一〇 竹島 SW 一〇〇〇 米の位置からカッターに警言来

五五三 接岸 上陸 七二五 離陸 七四五 本船着

一八〇〇 美保関沖合帰航

二上陸人員

おき 保安官 十四名

警察官 三名

くかりやう 保安官 十一名

県吏員 二名

計 三十名

三上陸地点の地勢

東島の西北に入江になつているところに上陸したが(写真参照)ここは、二〇七—三〇七  
位の舟であれば風ときは容易に接岸できる。

コンクリートにより石垣（高さ七尺一八尺）が築かれ、約五坪位の平地にテント張りの小舎があつて韓口人が六人いた。

コンクリートは、戦前日本人が築いたといつていた。

小舎の上、六米地奥の碑がある。  
（高さ、四尺、巾一尺二寸、厚さ、一尺の花崗岩）

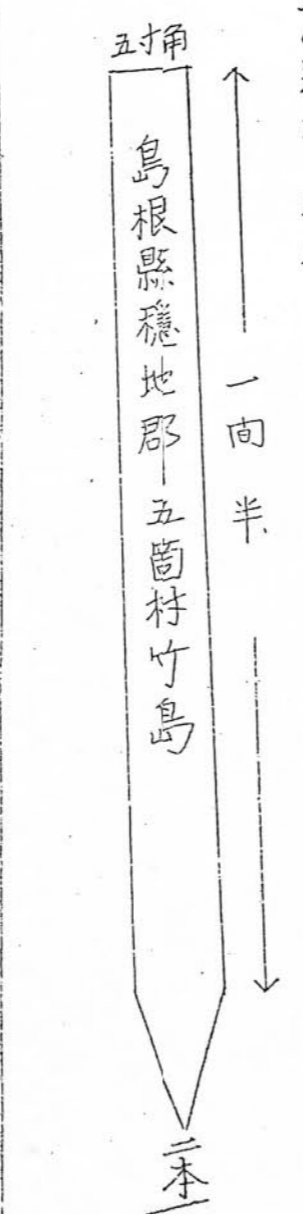
小舎のところから頂上七合目位までは登れる模標、東島は標高一五七米、西島は一三五米であつたが周囲は断崖で西島とも空洞になっている箇所が相当ある。

西島とも一ヶ所上陸地点がある。

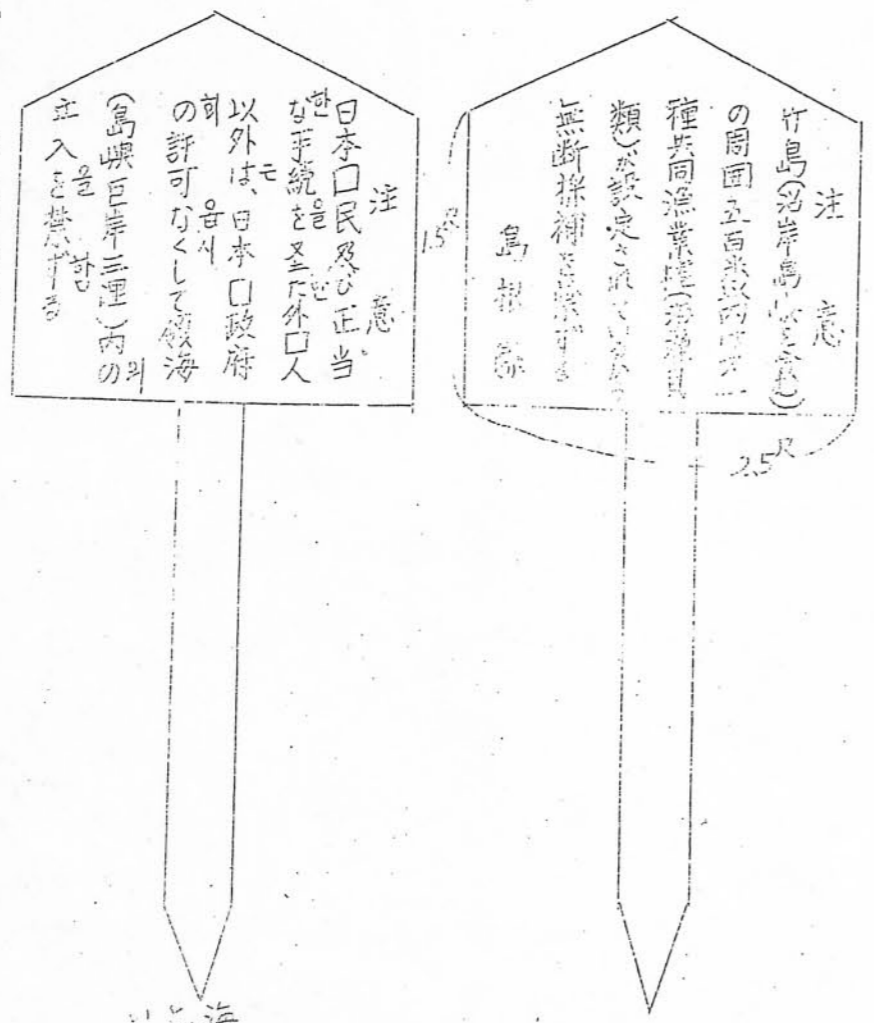
東島、西島の大きな岩山以外に約四十許りの岩礁が点在しており、周囲は約三料、樹木は全然なく、雑草（乳草）がまばらに生へている。

### 四上陸中の行動

(1) 次の判札と標柱を東島の堀立小屋のある漁民屯駐箇所 西方に建てた。



島根県の意志のもとに出張員が文案を考慮して建てた。



海上保安庁が本部及び外務省と電話連絡の上その責任において建てた。

### (2) 漁民よりの実情聴取

カッターがつくと同時に漁民六名が迎えてくれた。彼等は日本語が通じないので朝鮮語で実

情を聴取したが次のように語つた。

対話者 佐々木警部補  
漢 主 事

我々は六月九日午後三時、一行十人で鬱陵島からやって来て今日で十八日目になる。中四人は五日間いて素手靴の六十枚をもって帰島したが、我々六人はワカメ、テングサ、アワビをとりに来ているが、このため迎えの船が来ない。

食うに食なく一昨日、日本の船(錨れと確認)が六六とピースをくれて救われ嬉しかつた。その時盛んにアシカのことをきかれたがお互に言葉が通じなくて要領を得なかつた。

竹島が日本領であるか韓国領であるかという事は我々は関知しない。しかしこの島に来るについては警察署の出入港許可認が必要であるがこれは母船の船長が所持している。

我々一行六名の中、最年長の一名は十年前から毎年四月から七月にかけて竹島に来てゐる。他の一名は三手間の経験をもつてゐるが、他は今年初めて従事した者だ。我々は漁業会の組合員である。

國旗は発動機船につけてあり、我々は持つていない。

韓口の艦艇も大型漁船も、この島へは来ない。

一週交代位に五七から七七位の六馬力位の動力船が迎いに来てくれる。

我々が従事しているのは例年四月から七月にかけて主としてワカメ、テングサの海藻類とアワビ、サザエ、ノリをとるためである。

海藻類は素干にして鬱陵島へ送っている。

「獨島遭難漁民慰靈碑」は我々の同僚が出漁中、米軍の爆撃演習で死んだため知事が建てた、ということにはよく知っている。

出漁するについては特別の保護は受けていない。しかし当局者から注意せよとは出漁の度に口に云はれている。

ワカメもとリ盡したし一日も早く鬱陵島へ帰りた。

何とか鬱陵島へ送って貰えんだらうか

アシカは西の島とそれに遠なる小さな島にいて人が行くとき水にもぐつて容易に捕らうない。

毎年一ニコロ匹位棲息しているが我々はアシカは捕らうない。

現在鬱陵島と浦項との間は二十日から一月月に往復の定期船がある。

日本統治下時代は一週間に一度位だったが今は非常に不便だ。

鬱陵島は全部漁民で今、イカミ半島に揚げ、日用品を仰いでいる。

我々は田舎なので新聞も余り読まないしラジカも聞かない。

③ 韓国漁民に対する措置

六名の韓口人に対しては船隊指揮官の命により保安本部係員が嚴肅且つ事務的に日本領であることを話し彼等に退去を命令し母船が到着次々速かに退去するよう勧告した。そのために彼等は米、醬油等を欲していたが、上陸時隊員が所持していた食糧、煙草、を与えたのみで特に本船から食糧の給与は行わなかった。

竹島滞留中の韓國人

鄭元俊 三十四名

鄭福龍 三十五名

鄭子(音訳鄭錫九) 二十六名

李萬龍 三十一名

鄭無出 三十名

卞学鳳 三十九名

凡て鬱陵島南面道洞 附近に居住し、零細な漁民で家族が大抵五人から十人いた。

(4) 韓国漁民の現地における漁獲量

ワカメ ドラム玉一本に素干していたものを入っていた。約五〇貫位

更にムシロの上に干していた。

テングサ 二貫目位

アワビ ニ〇〇個

その他貝類 若干

(5) 施設の状況

無動力船 一隻

釜 鍋 三ヶ

一升ビン 四本

ビールビン 五本

ドラム缶 一本(天水飲料水用)  
各人着替シヤツ ニー三枚 毛布 二枚  
約三坪のテント張リ小舎(ムシ口敷)

(表面) 独島遭難漁民慰靈碑

(側面)

大韓民國慶尚北道知事 曹 在 十 題

檀紀四二八三年六月八日建

(裏面)

檀紀四二八一年六月八日 獨島에 出漁中이 드 漁民五十九名  
이 十八隻의 漁船에 分乘 操業中 美軍演習機의 誤認爆  
撃을 받아 死亡行方不明十四名 重輕傷六名 船船  
破壞四隻의 一大精事가 發生하였다 鯨濤風浪에  
도 不屈하는 祖國再建의 海洋勇士들에 게이 무는 寬  
柳한 橫厄이 나일 즉 美軍의 陳謝의 社會的同情이  
至하여 水中 寬魂과 子遺家族의 慰撫救護에 誠意를  
바친 바았으나 多恨哀情의 一端과 고사事時發生  
二週年을 하여

短碑을 이룩하고 삼가 遭難漁民諸位의 冥福을

五、竹島の水産

竹島の水産についても限定された僅かの慌しい調査であり、設備もなく且つ未開發の漁場であつて全く資料も乏しく殆んど推定に止まる部分が多く杜撰なものであることを遺憾に思うが概要を述べると次の通りである。

(1) 竹島は隠岐島島前から方位三百二十三度約九十哩の日本海の一小群島であつて外劃約三哩余の三角形に包まれた火成岩から形成される單式火山島であつて、見取圖の如く東西に二島あり、ほかに凡そ三十九箇の小島嶼からなつてゐる。

(2) 本島の南西海面巨岸一〇〇米以内は水深約五〇米程度で棚状をなし、それ以沖は急傾斜となり所謂断層海底と推定する。

その他の周圍の海底も殆んど同様と考へられる。

(3) 各島嶼の水面上の地形は、青年期の形相を呈し、絶壁であり、水面下も殆んど切削のようになつてゐるので、わがめ、



り、着生面積は思ったより狭小である。

これまで宣傳せし水たよりに採り盡くせないう程の  
豊富な資源量はなく特にのりに至っては平盤地形の岩  
面がないので極めて着生面積は狭く、このまま問題にならう程  
度のもので考へる。

貝類は、あわび、さざえ、えびし貝、かさ貝等があつて就中  
あわび、さざえは比較的多いと思料せらるゝが、これが棲息に  
適應する岩面が狭く潜水器具を使って採捕するに至つて  
は先づ永續性のない漁場と考へてよからう。従来ともすれば  
大きなあわびやさざえが採り盡せぬ程棲息しているものと  
一般に考へて、水、夢々島、宝の島からようこそ錯覚を起させて  
いるが、これは同島が内地より遠隔の海面にあつて漁業者が行  
くには必然的に積載能力の大きい動力船を必要とするので殆ん  
ど行かなかつたりと、又四月から八月までの風の短期間でなくば

春の採りかたは採捕 年あつて至るものか採息す

るために偶々これを取り上げられて凡そこのように大ききものと思われ  
思われたいが、このことは同島が特に内地沿岸に比して發育  
率のよき条件を具えていることにはならない。

また實際の適漁期は、風期間の五月から八月の四ヶ月間であ  
るが、一年のうち八ヶ月間は採捕休止の期間となるからこの条件  
を内地の海岸にあつてはめて見ると内地の海岸も本島産と同程度  
の大ききにならうことは間違ない。

本島の石花菜は延と質がよく量も相当あると思われ、  
ゆかめは本島では四月上旬から七月まで採捕せられるが、この  
際には六、七人の漁夫で六月一杯で刈り盡されてしまふ程度の  
狭小な面積で業として成り立たないと思われ、しかし本島の  
水産物としては、あしか、あわび、石花菜とともに重要なものか  
である。

現在韓口人によって採捕せられてゐるゆかめをみると二尺内外の

状態である。

次は同島の特有動物あしかであるが幸件が余程適して  
いると見えて別圖ノニの島に特に多くあつてくる。

春から夏にかけては特別に多いらしい。

このあしかはオフトセウに似た一牡多牝性の動物で一尾の  
牝で十数頭の牝を伴うこともあるらしい。

六月の頃一ニ頭の子供を産む。本島のあしかは他産のもの  
に比して稍小形であるといわれり。

常に海水中に棲息し岩の上で眠る。その性質は用心深  
くて睡眠中は一頭の番獸がいつ危険も感ずると敏速に

海中に潜入するといふことである。  
これに近よるには必ず風上から行かず風下より行くべきだと

いわれり。

今回調査ではノニの島に行つてみれば一頭もその次を見ることが  
出来なかつた。島前には毎年隠岐島五箇村の人のよつて二十頭程度生  
捕りにせられたといふ。戦時中杜絶していた。

本年から又希望もあり六月十日許可を乞へたが現に出漁  
準備中と思われが最近微妙な日韓交渉の動きが  
見受けられるので出漁については何年か方法で安全保証の  
施策が必要である。

特に留意を要するのはい、採捕に当つては種族保存のため  
適切な制限を加えて保護し、本島をいつまでもあしかの棲息  
地とすべきであると思ふ。

次に漁場としての関心事は前述の通り巨岸一〇〇〇米線の  
棚についてであるがこの底質が砂泥或は砂礫とすべし纏  
まつた底棲漁類の棲息に適し一本釣、延縄等の漁場として適  
應するうてあるが今回の調査ではこの棚は底質が岩盤上の僅か  
の小石と貝殻を認めただけあり全部がこの状態ならこれ又  
大きな期待をすることはできないと思ふ。

しかし乍ら、これは二三行の調査で島の周囲全部を調査し、誤  
りはないから明確に判定はできないが近く施行の隠岐島高島振  
興法に基く未開発漁場の基礎調査を実施せられた時は、漁  
場の価値が判然とするものと思ふ。

次は、竹島周辺の洄游性魚族についてあるが同島を洗つて北上す  
る対馬暖流の表面一八五度と(二八六一七時)であつたので  
これに乗る。七、八、九は従来実績による。いか釣ともいふ  
節節の有望である。

四 以上を要約すれば根付漁業には期待はもてないが洄游性魚類に  
ついては期待ができると思ふ。

殊に同島の東方約十哩にあって最近発見された「神世豚塩」と  
形成上の関連性があるものとするれば又調査の結果によつては有望なる  
漁場となることも考へらる。

何れにしても同島が内地より遠隔の地にあり且つ避難難地  
や飲料水もなく基地としての施設をする平地もない状態である  
から本島周辺へ開発は幾多の困難を伴うものと思ふ。